

三宅遺跡群1

— 第7次調査報告 —

2021

福岡市教育委員会

三宅遺跡群1

— 第7次調査報告 —



遺跡名 MYK-7
調査番号 1931

2021

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う三宅遺跡群第7次発掘調査について報告するものです。この調査では古代の掘立柱建物を検出するとともに、古代の須恵器や土師器、瓦などの遺物が出土しました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が南区南大橋1丁目の集合住宅建設に伴い、令和元（2019）年7月22日から10月25日に発掘調査をした三宅遺跡群第7次調査の報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は加藤良彦・三浦萌が行った。
3. 遺物の実測は三浦・立石・棚町・久富が行った。
4. 遺物の写真撮影は三浦が行った。
5. 製図は三浦・田中が行った。
6. 本書に掲載した方位はすべて座標北である。
7. 本書に掲載した座標は世界測地系である。
8. 本書に使用した遺構略号はSB=掘立柱建物、SK=土坑、SD=溝、SP=柱穴（ピット）、である。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10. 本書の執筆・編集は三浦が行った。

遺跡名	三宅遺跡群	調査次数	7次	調査略号	MYK-7
調査番号	1931	分布地図図幅名	39 三宅	遺跡登録番号	2825
申請面積	784.73m ²	調査対象面積	314.96m ²	調査面積	276.11m ²
調査期間	令和元年7月22日～令和元年10月25日	事前審査番号	30-2880		
調査地	福岡市南区南大橋1丁目1169-1、1170-4				

目 次

I.	はじめに	1	2.	基本層序	8
1.	調査に至る経緯	1	3.	遺構と遺物	8
2.	調査の組織	1	1)	掘立柱建物	8
II.	遺跡の立地と環境	2	2)	土坑	8
1.	地理的環境	2	3)	小穴	13
2.	歴史的環境	2	4)	その他	13
III.	調査の記録	5	IV.	まとめ	27
1.	調査の概要	5			

挿図目次

図1	三宅遺跡群周辺遺跡立地図 (1/25000)	3	図15	SP-028出土遺物実測図(1/3)	16
図2	三宅遺跡群第1~7次調査地点 (1/2500)	4	図16	I区出土遺物(1/3)	17
図3	第7次調査区位置図(1/1000)	5	図17	I区出土遺物(1/3)	18
図4	調査区全体図(1/100)	6	図18	I区出土遺物(1/3)	19
図5	調査区土層図(1/60)	7	図19	I区出土遺物(1/3)	20
図6	SB-041遺構実測図(1/40)	9	図20	I区出土遺物(1/3)	21
図7	SK-001遺構実測図(1/20)	10	図21	I区出土遺物(1/3)	22
図8	SK-001出土遺物実測図(1/3)	11	図22	II区出土遺物(1/3) (71・72:1/1)	23
図9	SK-004遺構実測図(1/20)	12	図23	II区出土遺物(1/3)	24
図10	SK-004出土遺物実測図(1/3)	12	図24	III区出土遺物(77:1/3) (78:1/4)	25
図11	SK-014遺構実測図(1/20)	13	図25	その他の遺構出土遺物(1/3)	26
図12	SK-014出土遺物実測図(1/3)	14	図26	三宅遺跡群高低差模式図 (縮尺不統一)	28
図13	SP-028遺構実測図(1/10)	15			
図14	SP-028出土遺物実測図(1/3)	15			

図版目次

図版1	1. I区全景(北から)	2. III区全景(北から)
図版2	1. II区全景(東から)	2. SB-041全景(北から)
図版3	1. SK-001土層(西から) 3. SK-004土層(西から) 5. SK-014土層(東から)	2. SK-001(西から) 4. SK-004完掘(東から) 6. SK-014(東から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 30（2018）年 12 月 11 日付けで、福岡市南区南大橋 1 丁目 1169-1、1170-4（敷地面積：784.73m²）における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が福岡市教育委員会宛てになされた（事前審査番号：30-2-880）。

これを受けた経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である三宅遺跡群に含まれていることから、平成 31 年 3 月 5 日に工区内の一部において試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下 110cm において遺物包含層を、140cm において遺構を確認したため、申請者と協議を重ねた結果、発掘調査を実施することとなった。

本調査は令和元年 7 月 22 日～10 月 25 日までを行い、報告書作成の整理作業は令和 2 年度に行った。

2. 調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会
(発掘調査：令和元年度)

調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人
	同課調査第 2 係長		大塚紀宜
庶務：	文化財活用課管理調整係		松原加奈枝
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係		山本晃平
調査担当：	埋蔵文化財課調査第 2 係	文化財主事	加藤良彦
		同係文化財主事	三浦 萌

(整理・報告：令和 2 年度)

整理・報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人
	同課調査第 2 係長		藏富士寛
整理・報告庶務：	文化財活用課管理調整係		松原加奈枝
整理・報告担当：	埋蔵文化財課調査第 2 係文化財主事		三浦 萌

II. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

玄界灘と背振・三郡山系に挟まれた福岡市には、糟屋、福岡、早良、今宿の4つの平野が広がっている。そのうちの一つである福岡平野を流れる那珂川と御笠川の周囲には浸食の進んだ丘陵や段丘が残されている。当遺跡はその那珂川西岸の沖積地上に位置する。大正末から昭和初期の地形図を見ると当該地域は南東に開く谷の開口部の山裾に位置しており、周辺は田んぼであったことがうかがえる。

2. 歴史的環境

三宅遺跡群は東西に約500m、南北に約250mの規模を持つ主に奈良～平安時代の遺跡によって構成されている遺跡群である。2015年に三宅A遺跡、三宅廃寺、三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡、そして大橋C・D遺跡を包含して称されることになった。過去においては「三宅廃寺」「三宅A遺跡」として調査がされており、今回は数えて7度目の調査となる（表1参照）。

三宅遺跡群が主に存在していた7世紀～9世紀の周辺遺跡としては那珂君体遺跡、板付遺跡、麦野遺跡、雜隈限遺跡、井相田C・E遺跡、高畠遺跡、井尻B遺跡、そして郡衙推定地である那珂遺跡群などがある。このうち那珂遺跡群、那珂君体遺跡、板付遺跡、井相田C・E遺跡、高畠遺跡において大宰府から水城東門を経て博多遺跡群方面へ向かう官道東門ルートが確認されている。また高畠遺跡と井尻B遺跡では古代寺院の可能性がある遺構が発見されている。近くの野間B遺跡4次調査で西門ルートが出ているが、大橋E遺跡でも三宅廃寺に通じる道路と新羅焼が出土している。

三宅遺跡群は遺跡群に含まれているとおり三宅廃寺がかかつて存在していた場所であるとされている。過去の調査の中では遺跡群のはば中央部で行われた第一次調査で瓦溜から觀世音寺の創建瓦である老司I式軒丸瓦、掘立柱建物と土坑から老司II式軒丸瓦が出土している。このことから三宅廃寺の築造年代は7世紀後半～8世紀初頭であり、その他の出土遺物からその存続期間は9世紀前半までにわたる可能性があることが判明した。その後おこなわれた第2次調査でも区画溝や掘立柱建物、老司I式軒平瓦や「寺」銘の墨書・刻書土器、転用硯や澄明皿などが出土し、当該地域が寺院跡である可能性が高まっている。しかし未だに全容が判明しているわけではなく、今回の調査を含めて今後の調査に期待がされている。

【参考文献】

- ・福岡市教育委員会 1979 「三宅廃寺」
- ・福岡市教育委員会 2004 「三宅廃寺2」
- ・福岡市教育委員会 2004 「三宅廃寺3」

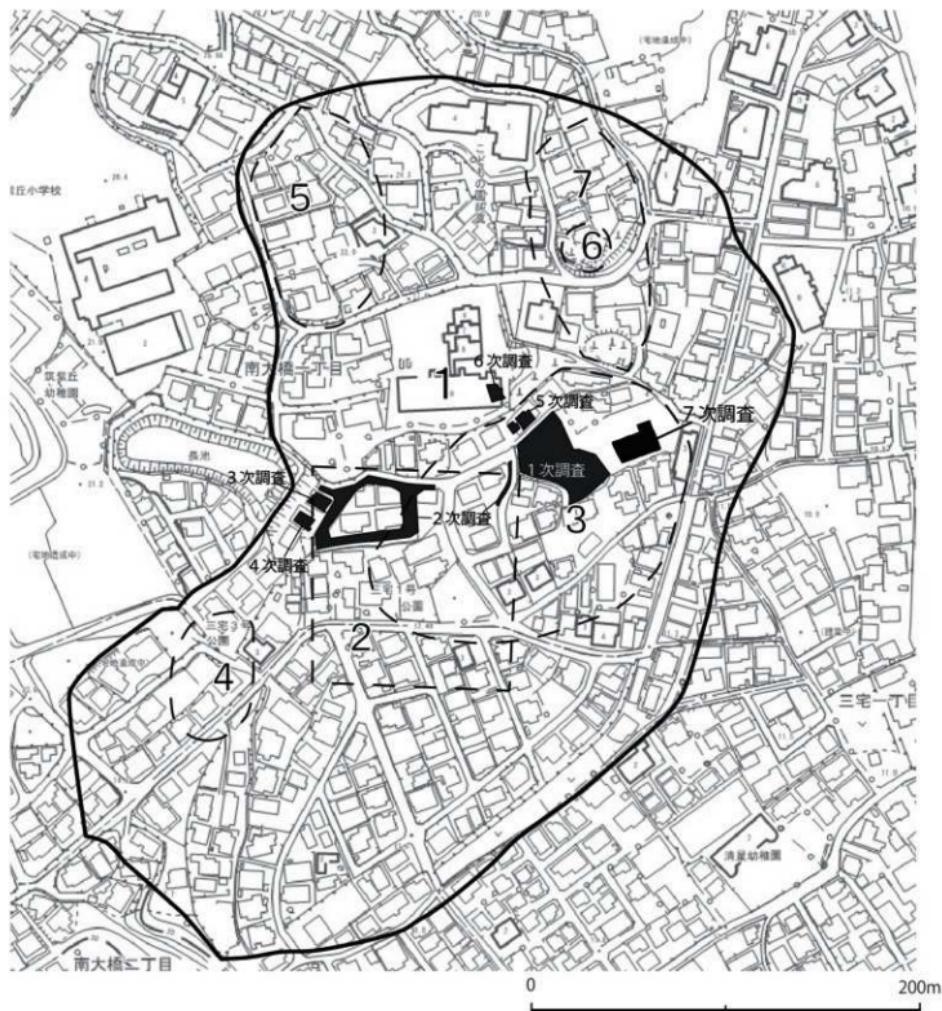
調査年	調査 次数	遺構、遺物	市報	備考
1977	1	掘立柱建物・土坑・溝・瓦溜（古代）	50	
2002	2	溝（古墳）、掘立柱建物・土坑・溝（古代）、土坑（中世）	826	
	3	溝・柱穴（古代）		
2002	4	溝・柱穴（古代）	827	
	5	溝・土坑・柱穴（古代）		
2001	1	土坑	年報	三宅A遺跡としての報告
2019	7	掘立柱建物・土坑・溝・杭（古代）、水田（中世）	本報告	

表1 三宅遺跡群における過去の調査一覧



1. 三宅遺跡群 2. 大橋E遺跡 3. 野多目C遺跡 4. 井尻B遺跡 5. 比恵遺跡群 6. 那珂遺跡群
7. 雀居遺跡 8. 那珂君休遺跡 9. 板付遺跡 10. 高畠遺跡 11. 立花寺遺跡 12. 中村町遺跡
13. 井相田C遺跡、仲島遺跡 14. 麦野A~C遺跡 15. 雜餉隈遺跡

図1 三宅遺跡群周辺遺跡立地図 (1/25000)



- 1:三宅遺跡群 2:三宅廃寺 3:三宅A遺跡
4:三宅岩野瓦窯跡 5:大橋C遺跡 6:三宅瓦窯跡 7:大橋D遺跡

図2 三宅遺跡群第1～7次調査地点 (1/2500)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回報告する三宅遺跡群第7次調査地は南区南大橋1丁目1169-1、1170-4に所在する。近隣の調査としては調査区南西隣接地において三宅廃寺第1次調査が行われている。特に瓦溜から確認された老司式軒丸瓦によって三宅廃寺の存在が推定されている。

発掘調査は、当該工事の地下へ影響が及ぶ314.96m²を対象とした。廃土処理の関係上、調査区をL字状に3分割した。まず東側半分をI区として調査し、I区調査終了後に西側半分をII区、I区北側の凸部をIII区として調査を行っている。I区東側において地表面から約102cmで遺物包含層が、西側において同じ高さで遺構が確認されたため、この上面までの表土の鶴取りを行った後、人力で遺構の検出及び掘削、遺構実測、写真撮影を行った。発掘調査は令和元年7月22日に開始し、令和元年10月15日に終了している。

本調査区で検出された遺構は古代の掘立柱建物が1棟、土坑3基、溝2条、杭跡と考えられるピット群、そして中世の水田面である。出土遺物等のはほとんどは瓦である。掘立柱建物は2間×3間の規模が確認できており、三宅廃寺の寺院域を構成する建物である可能性が非常に高い。

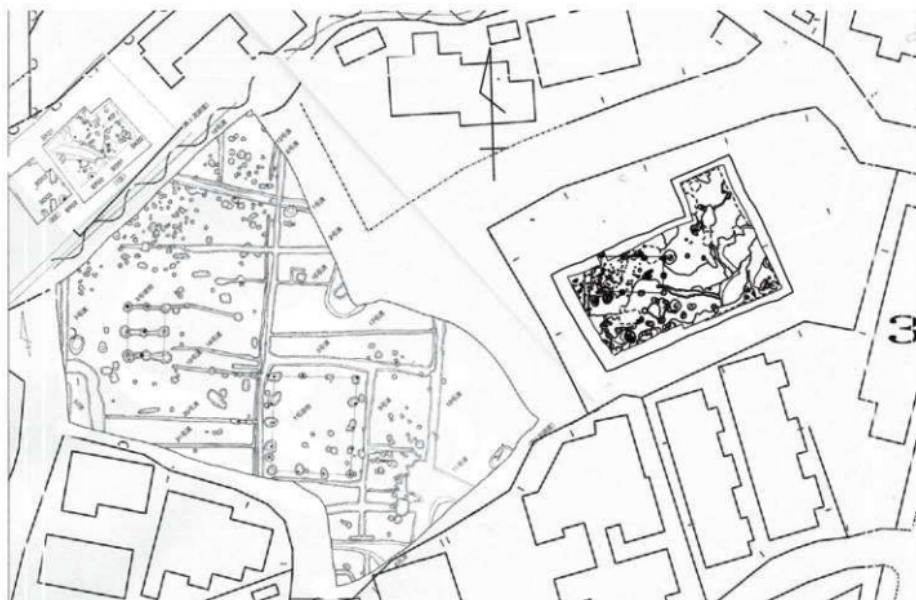
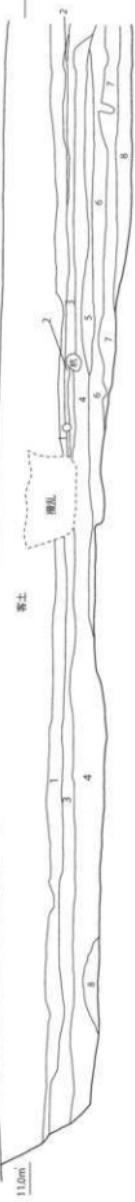


図3 第7次調査区位置図 (1/1000)

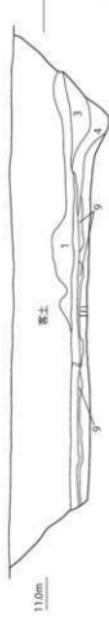


図4 調査区全体図 (1/100)

I・III区東壁土層

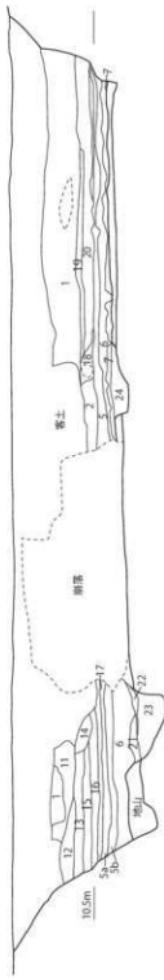


III区北壁土層



- 1 原状色土(田の土), 砂土
2 白色粘土, 黄褐色
3 白色粘土, 黄褐色
4 白色土, 黄褐色
5 黄褐色粘土, 黄褐色
6 黄褐色粘土, 黄褐色
7 黄褐色粘土, 黄褐色
8 黄褐色粘土, 黄褐色
9 黄褐色粘土, 黄褐色
10 黄褐色粘土, 黄褐色
11 黄褐色粘土, 黄褐色
12 黄褐色粘土, 黄褐色
13 黄褐色砂質粘土
14 黄褐色砂質粘土
15 黄褐色砂質粘土
16 黄褐色砂質粘土
17 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
18 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
19 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
20 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
21 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
22 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
23 黄褐色砂質粘土, 黄褐色
24 黄褐色砂質粘土, 黄褐色

II区西壁土層



II区北壁土層

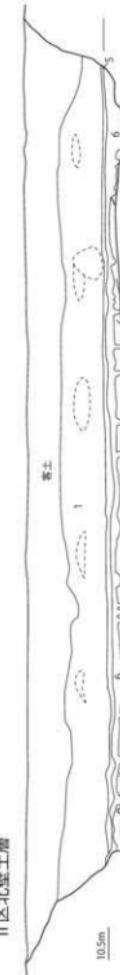


図5 調査区土層図 (1/60)

2. 基本層序

基本的には地表面から約1mは客土または耕作土であり、遺構検出面に包含層が1～3層堆積しているという層序をとる。調査区I・III区の東壁土層を見ると地表から最大60cmほどある客土の下に耕作土である1・2層が20cm弱堆積する。III区では中世以降の溝が壁沿いに存在しており、その堆積土3・4層がIII区側からI区にかけて堆積する。その後、I区では包含層1～3層である5・6・7層が約40cm堆積し、遺構検出面に至る。III区北壁土層も層の厚さ以外はほぼ同様の堆積を示すが、遺構検出面である地山の土色が異なる。II区は少々異なる堆積を示す。西壁土層を見ると客土と耕作土である1層の下に約20cmの砂質土層が堆積し、その下に包含1～3層である5～7層が堆積する形をとる。一方でII区北壁土層をみると砂質土層はみられず、耕作土の直下から包含1～3層が堆積することとなる。

3. 遺構と遺物

1) 挖立柱建物

調査区の北部で掘立柱建物が一棟確認できた。

SB-041 (図6)

調査区北部で確認された主軸方位N-3°-Eにとる2間×3間の掘立柱建物である。南側桁行全長6.42m、柱間は西から2.2m、2.08m、2.32m。北側桁行全長6.4m、柱間は西から東西長3.72mである。北側桁行全長6.2m、柱間は西から2.16m、2.28m、1.96mである。西側梁行全長3.56m、東側梁行全長3.72m、柱間は北から1.84m、1.88mである。S P-009、023、029、030、031、037、038、039、040で構成される。柱穴は隅丸方形に近い形をとる。図示できる遺物はないものの出土した繩目叩きのみられる瓦等から8世紀ごろの建物であると考えられる。

2) 土坑

3基の土坑が発見された。

SK-001 (図7)

I区北部、調査区全体の中央付近で発見された長軸14.2m、短軸1.34m、深さ0.52mの土坑である。埋土は褐色土、黒色土、暗灰色粘質土であり、褐色土は耕作土の可能性がある。S B-041を構成するS P-009を切っているように見えるものの、検出が不明瞭であったこともありS B-041よりも新しい時期であるとは断言できない。

出土遺物 (図8)

出土遺物はいずれも破片の状態で出土した。1は高台径8cm、残存高2.1cmの赤焼きの須恵器の壺である。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、内面の底面はナデである。底部付近が1/4程残存している。2は高台径8cm、残存高2.8cmの黒色土器A類の壺である。内面にわずかにミガキが残るもの、外面の調整は摩滅しており不明である。底部付近が1/5程残存している。3は軒丸瓦であり、凹面に布目が確認でき、側面はヘラ切りが施されている。残存長16cm、厚さ1.6cmである。

SK-004 (図9)

調査区西側中央付近においてI区とII区を跨いだ形で発見された。長軸1.36m、短軸1.1m、深さ0.52mの規模である。埋土は主に黒色砂質土であり、底面に近づくにしたがって粘質土や粘土を含む

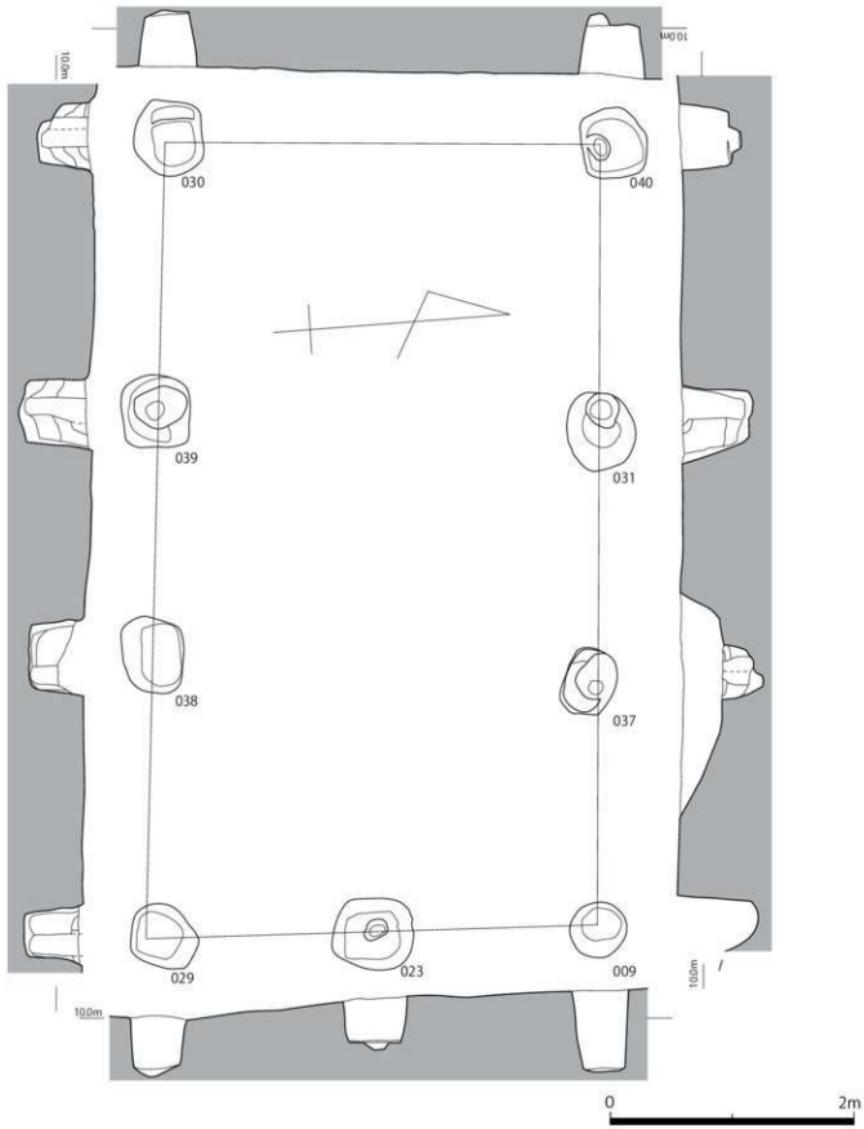


図6 SB-041 遺構実測図 (1/40)

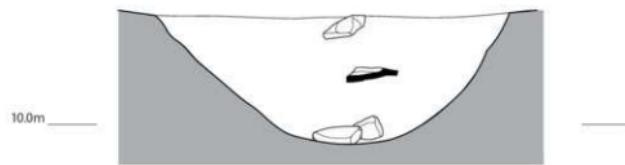
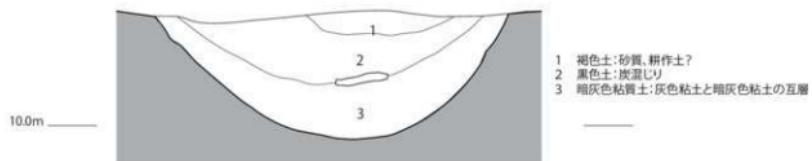
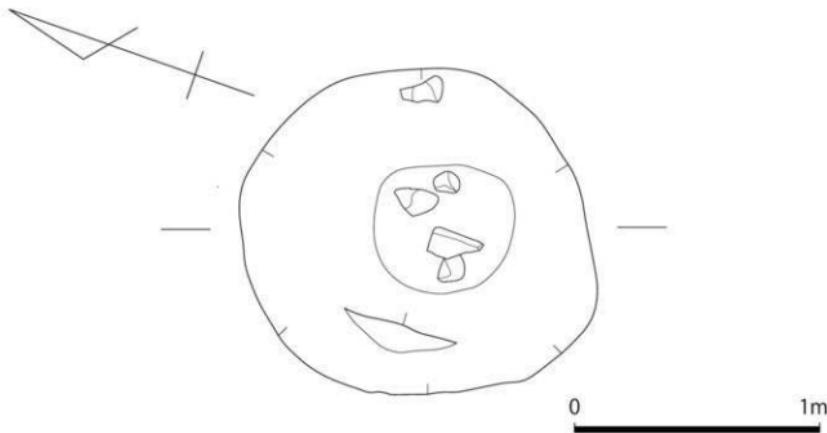


図7 SK-001 遺構実測図 (1/20)

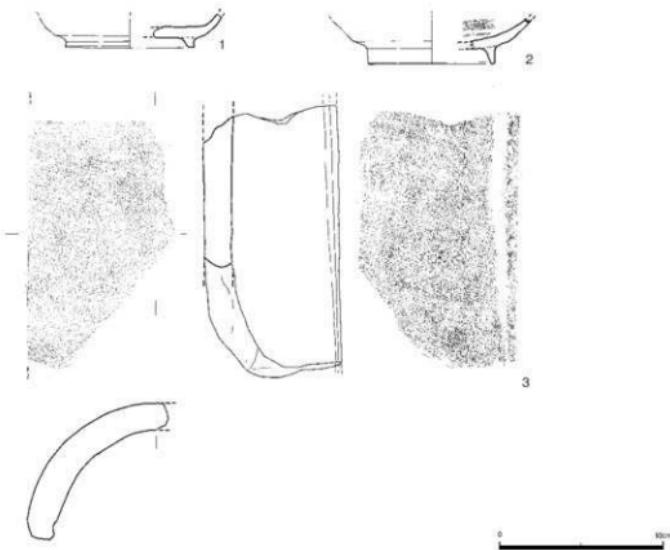


図8 SK-001出土遺物実測図 (1/3)

ものになる。包含2層を切っていることから中世以降に掘られたものといえる。

出土遺物(図10)

出土遺物はいずれも破片の状態で出土した。4はカマドの脚部片である。残存高は12.8cmであり、外面調整はタテハケ、内面調整はケズリである。裾部はナデが施されている。5は高台径9cm、残存高2.3cmの赤焼きの須恵器の坏である。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、内面の底面はナデである。底部付近が1/6程残存している。6は高台径8cm、残存高2.3cmの土師器の坏である。内面の一部にヨコナデがみられるものの、大半が摩滅しており不明である。底部付近が1/4程残存している。

SK-014(図11)

調査区II北部で発見された長軸1.06m、短軸0.92m、深さ0.44mの土坑である。堆積状況から一度埋没したのちにもう一度掘りなおした可能性が考えられる。上面で土師器の小形甕が発見された。

出土遺物(図12)

7は土師器の小形甕である。土坑の上面で発見された。口径19cm、高さ16.05cmでありほぼ完形となる。外面調整はタテハケ、内面調整はケズリである。内外面ともに底部付近の調整は摩滅しており不明である。浅黄橙の胎土を呈する。8は高台径10cm、残存高1.7cmの土師器の坏である。内外面ともにナデが施されている。底部付近が1/4程残存している。9は弥生時代前期の甕の口縁部である。他の遺物との流れ込みであると考えられる。きざみがみられる。10はカマドの底部分である。底の上部分の調整はハケ、底上部の調整はヨコナデを施した後にハケ、底下部の調整はハケであり工具による調整の痕が残っている。

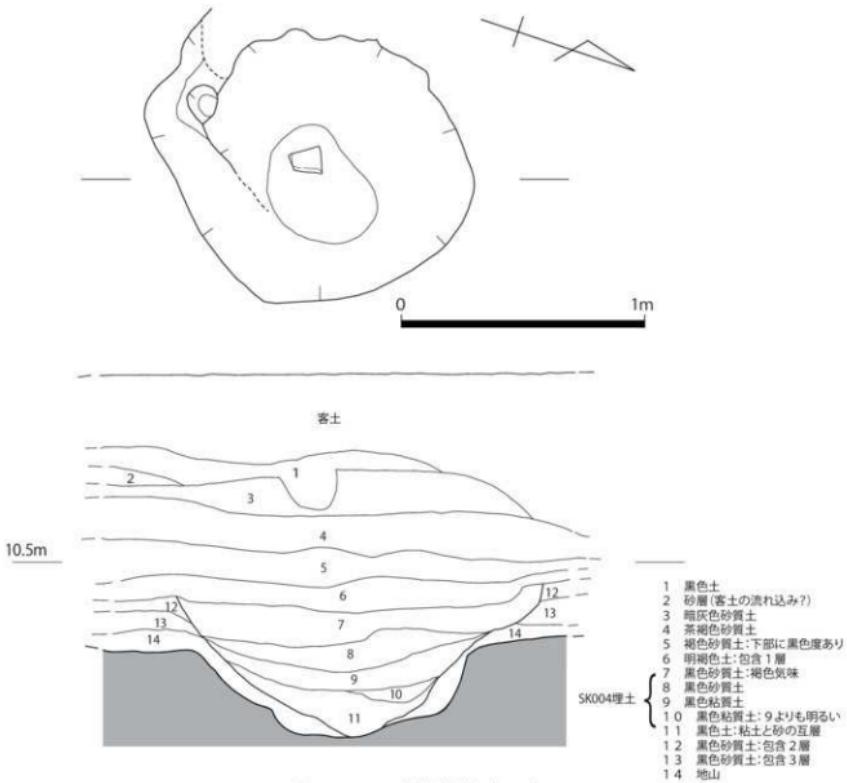


図9 SK-004 遺構実測図 (1/20)

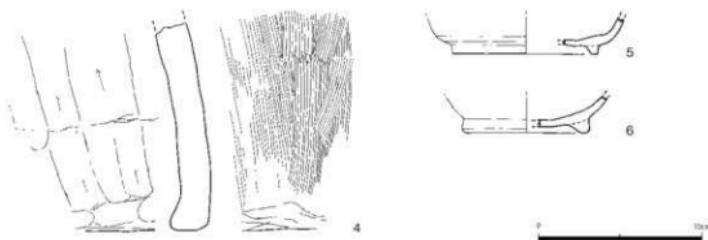


図10 SK-004 出土遺物実測図 (1/3)

3) 小穴

SP-028 (図13)

SP-037の北東側に位置する柱穴もしくは小穴である。0.5m × 0.52m、深さ0.19mの規模であり、掘立柱建物を構成する柱穴と類似した形態をとるが、調査区内において確認することはできていない。建築部材と考えられる木製品と丸瓦をはじめとした瓦が出土した。SP-037をわずかながらきつているため、SB-041よりも新しい時期のものであると考えられる。

出土遺物 (図14, 15)

1は丸瓦である。厚さ1.6cm、残存長15.8cm、残存幅9.3cm。凸面は左燃りの縄目、凹面には布目が確認できる。側面はヘラ切りが施されている。12・13は建築部材と考えられる木製品であるが、どの部位であるかは不明である。どちらも穴が確認できる。12は厚さ3.2cm、幅8.1cm、残存長47.5cmである。13は厚さ2.9cm、残存幅5.2cm、残存長46.5cmである。同一部材であったものが分離した可能性もある。

4) その他

遺構検出面上に存在した包含層から出土した遺物とその他の遺構から出土した遺物について述べる。包含層出土遺物は調査区ごとに報告する。いずれも破片が主であり、口径・高台径とともに復元したもののがほとんどである。いずれも中世以降の包含層である。

I区出土遺物 (図16~21)

I区を調査中に発見された遺物である。ほとんどが破片の状態で出土した。

14~21は包含層1層から出土した。14~16は須恵器の坏身である。14は高台径8cm、残存高1.7cmである。内面はケズリ風のナデ、外面の側面は回転ヨコナデ、底面が回転ヘラケズリである。底部付近が1/8ほど残存している。15は高台径8.4cm、残存高2.3cmである。内外面ともに側面は回転ヨコナデ、底面はナデである。底部付近が1/3ほど残存している。16は高台径10cm、残存高2.2cmであり、赤焼きである。内外面ともに回転ヨコナデが施されているが、内面の底面はナデ調整で

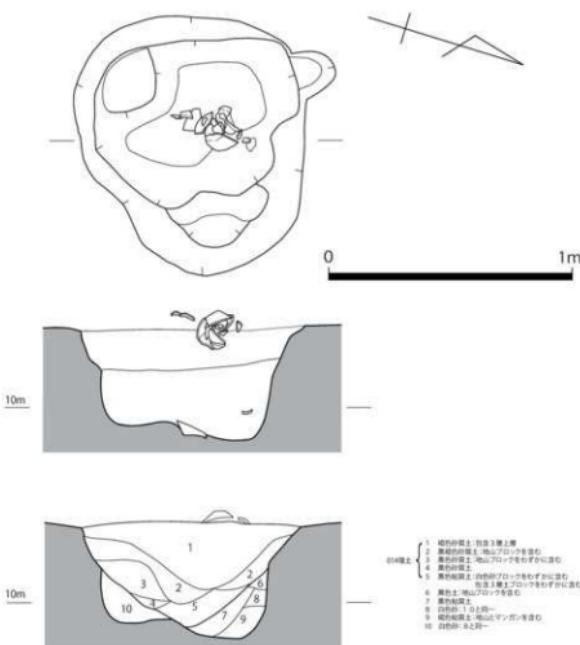


図11 SK-014 遺構実測図 (1/20)

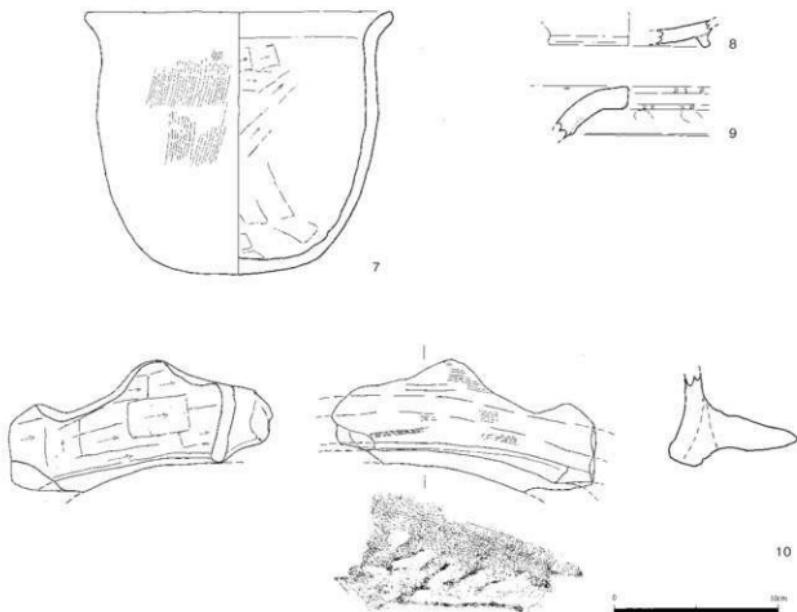


図 12 SK-014 出土遺物実測図 (1/3)

ある。底部付近が1/8ほど残存している。17・18は土師器の坏身である。17は高台径8cm、残存高2.1cmである。内外面調整はナデである。底部付近が1/8ほど残存している。18は高台径8cm、残存高2.2cmである。内面調整は摩滅しており、外面調整は剥離のため不明である。底部付近が1/3ほど残存している。19は高台径4.6cm、残存高1.7cmの黒色土器B類である。内面調整にミガキ、外面調整は底面がナデ、側面から高台にかけてはヨコナデである。黒色を呈する。高台付近のみ出土した。20は越州窯系青磁の口縁部片である。口径18cm、残存高4.5cm。口縁部付近の1/7程が残存している。21は白磁碗である。残存高4.9cmであり、白磁IV類である。22～25は包含層2層から出土した。22は須恵器の蓋である。口径16cm、残存高1.8cmである。外面調整は回転ヘラケズリと回転ヨコナデ、内面調整は回転ヨコナデとナデである。1/10ほどが残存している。23は須恵器の坏身である。高台径7.4cm、残存高2.9cmである。内面は回転ヨコナデとナデ、外面はナデ、高台は回転ヨコナデが施されている。底部付近が1/6ほど残存している。24は土師器の大皿である。口径15cm、残存高3.8cmである。底部は回転ケズリが施された後にナデが施されている。1/3ほどが残存している。25は白磁碗の口縁部でありIV類である。26～28は包含2～3層の間で出土した。26・27は須恵器の坏である。26は高台径8.8cm、残存高2.7cmである。内外面ともにナデと回転ヨコナデが施されている。外面には一部ケズリがみられる。底部付近が1/5ほど残存している。27は高台径8cm、残存高3cmである。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、外面の一部に回転ケズリがみられる。底

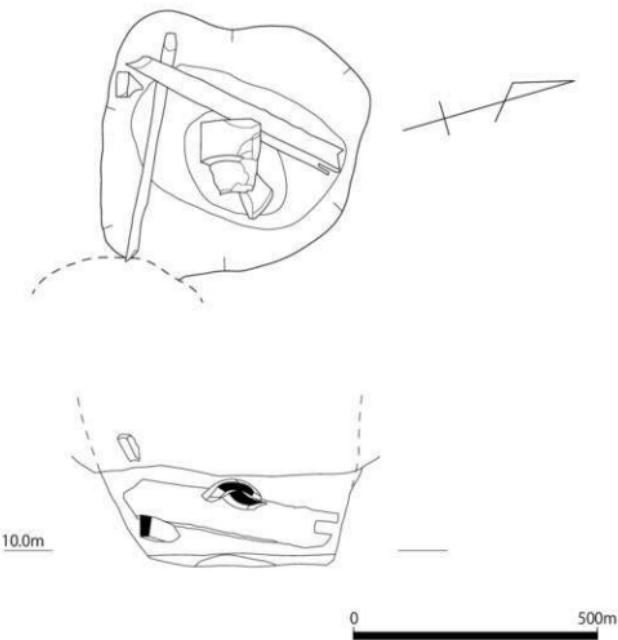


図 13 SP-028 遺構実測図 (1/10)

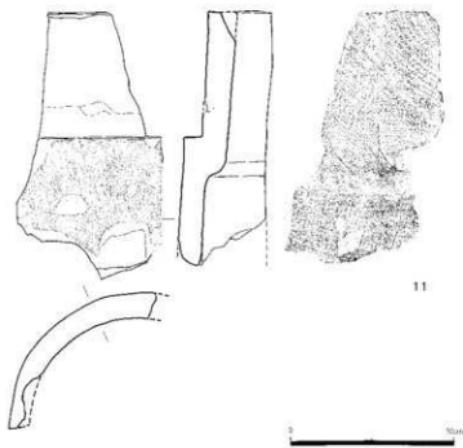
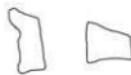
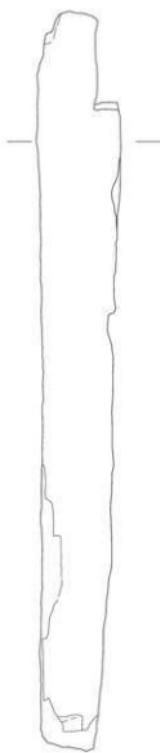
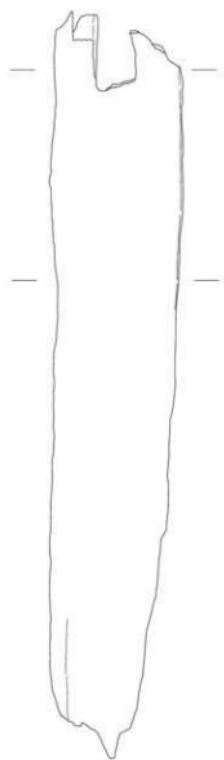


図 14 SP-028 出土遺物実測図 (1/3)



12

13

0 10cm

図 15 SP-028 出土遺物実測図 (1/3)

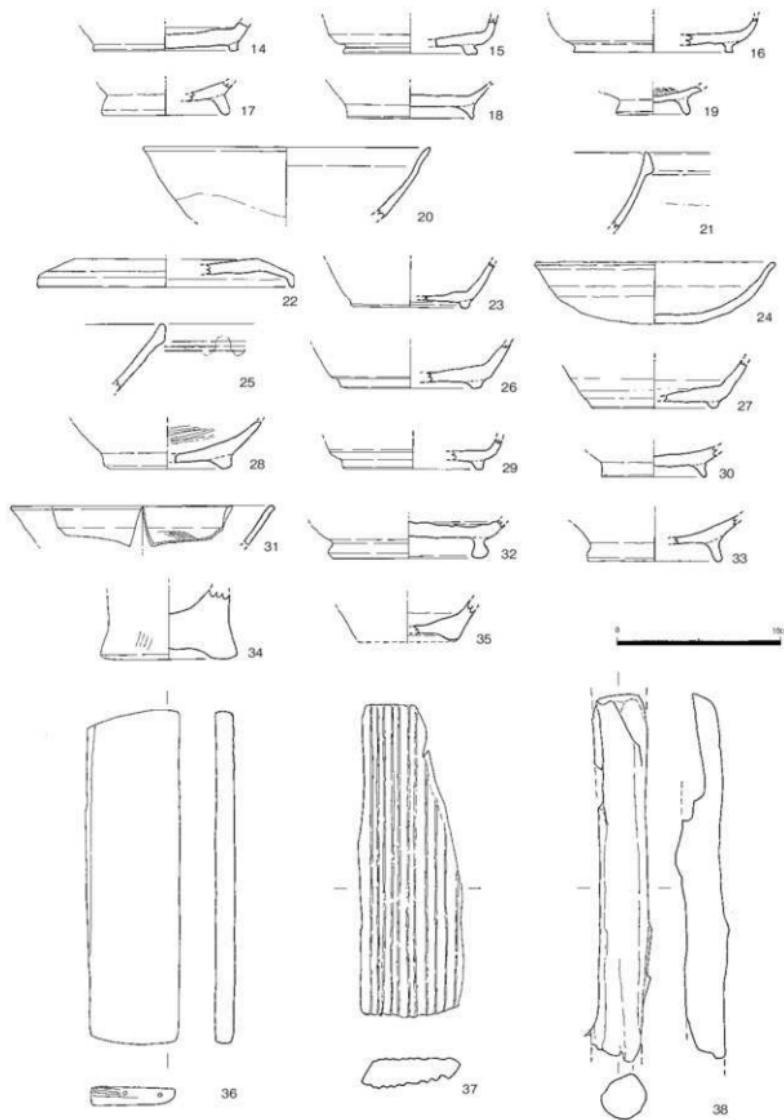


図 16 I 区出土遺物 (1/3)

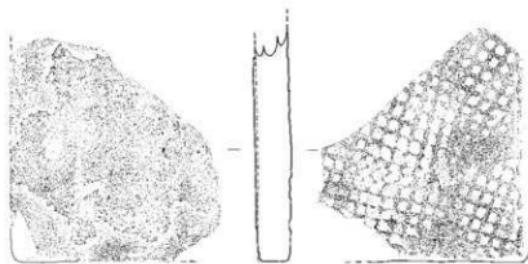
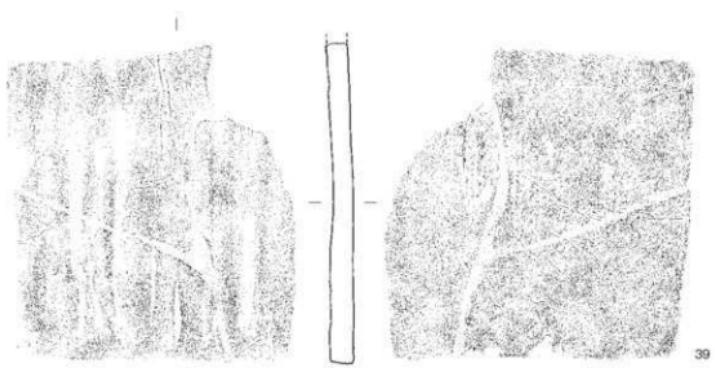


図 17 I 区出土遺物 (1/3)

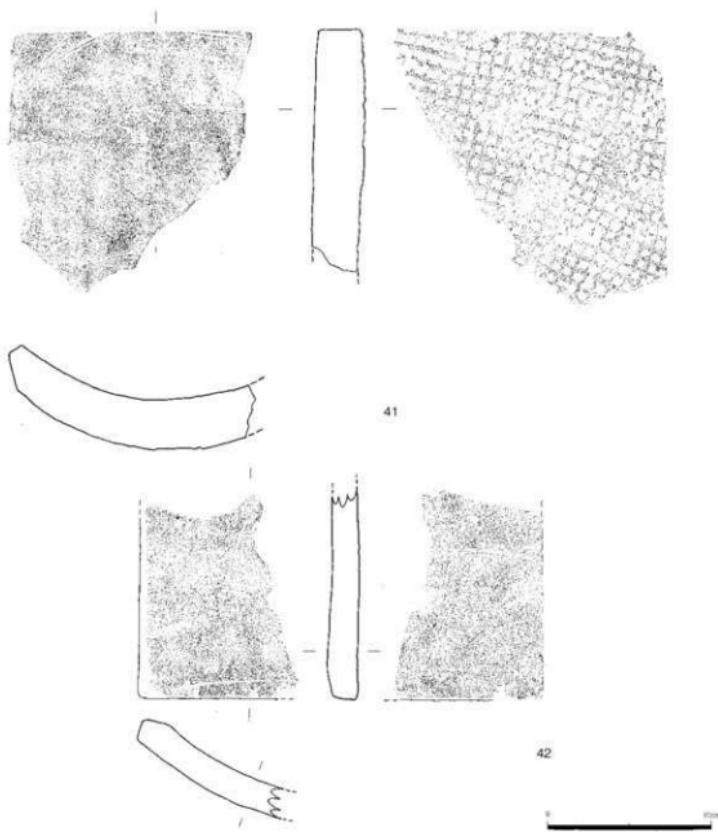
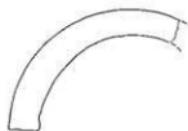
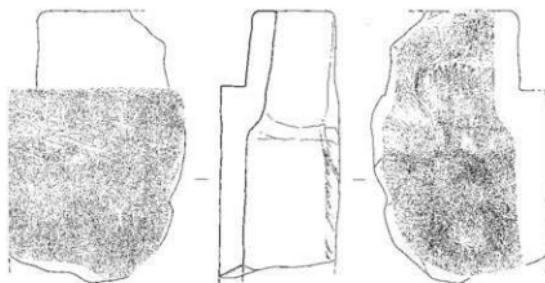
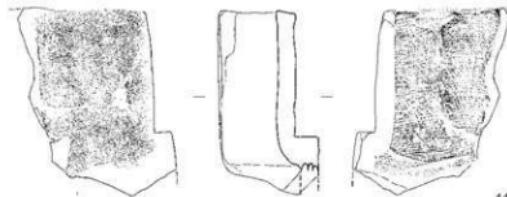


図 18 I 区出土遺物 (1/3)

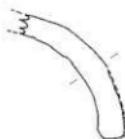
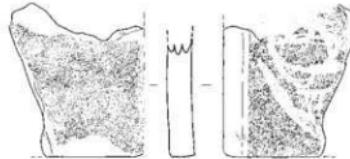
部付近が 1/5 ほど残存している。28は土師器の壊である。高台径 8cm、残存高 2.8cm であり、内面にミガキが見られる。底部付近が 1/2 ほど残存している。29~31は包含層 3 層で出土した。29は須恵器の壊である。高台径 8.8cm、残存高 1.9cm である。内外面ともに回転ヨコナデが施されている。30は土師器の壊である。高台径 8cm、残存高 2cm である。31は同安窯系と思われる青磁塊の口縁部の破片である。32~38は遺構検出面直上で発見された。32は須恵器の壊である。高台径 10cm、残存高 2.3cm である。内面調整は回転ヨコナデ、外面調整はナデである。高台には回転ヨコナデが施されており、底部に板圧痕が残っている。33は土師器の壊である。高台径 8.4cm、残存高 2.9cm である。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。底部付近が 1/3 ほど残存している。34と 35



43



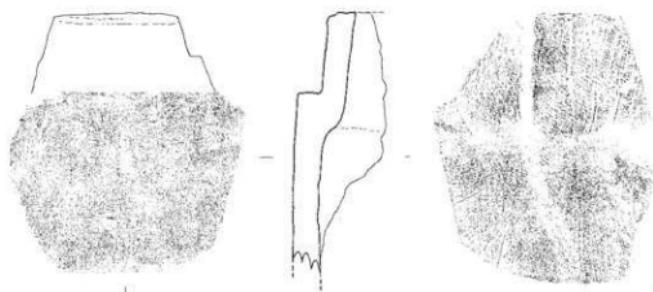
44



45



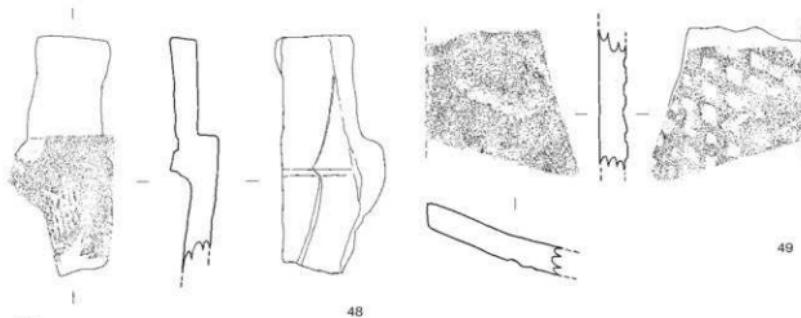
図 19 I 区出土遺物 (1/3)



46



47



48



図 20 I 区出土遺物 (1/3)

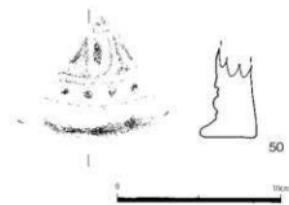


図21 I区出土遺物 (1/3)

面には布目がわずかにみられるものの、全体的にスグが厚はっく付着している。側面はヘラ切りが施されている。41の凹面は布目のちに部分的に横方向のナデが施されている。側面はヘラ切りである。42は凹面には布目のちケズりが、凸面にはナデのちケズりが施されており、側面はヘラ切りである。43～45は丸瓦であり、包含層から出土した。43～45いずれも凹面に布目がみられ、凸面には工具などによるナデが施されている。43の側面はヘラ切りが、44の側面はヘラナデ、45の側面にはヘラナデが施されている。46～50は遺構検出面で発見された。46は丸瓦であり、凸面には左巻きの繩目が見られる。凹面は布目がみられ、一部工具によるナデがある。47は丸瓦の端部である。凹面に布目がみられ、側面はヘラ切りである。48は丸瓦であり、凸面に左巣りの繩目がみられる。凹面には布目がわずかに残るものはとんどが摩耗している。側面端部の調整はヘラナデと思われる。一部に縦痕が残る。49は平瓦であり、凸面に斜格子の叩き目がみられる。凹面には布目が残るもののが残ぎみである。側面にはヘラ切りが施されている。50は軒丸瓦である。風化はしているが、外縁部に鋸歯文がある。老司式I式かと思われるが不明瞭であるため断言はできない。1/8ほどが残存している。

II区出土遺物 (図22、23)

II区を調査中に発見された遺物である。

51は包含1層から発見された土師器の壊である。高台径8.6cm、残存高3.8cmである。内外面調整ともに大半が摩滅しているが、外面の底部付近にナデが残る。底部付近が1/4ほど残存している。52～57は包含2層から発見された。52・53は須恵器の蓋である。52は口径13cm、残存高2.45cmである。内外面ともに回転ヨコナデを施しており、外面の上部には回転ヘラケズリがみられる。53は残存高2.1cmである。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、外面の上部に回転ヘラケズリがみられる。54～56は須恵器の壊である。54は高台径9.2cm、残存高2.1cmである。内外面ともに底部付近はナデが施されており、内面の一部と高台に回転ヨコナデがみられる。底部付近が1/4ほど残存している。55は高台径8.5cm、残存高2.1cmである。内外面ともに底部付近はナデが施されており、内面の一部と高台に回転ヨコナデがみられる。底部付近が1/2ほど残存している。56は高台径10cm、高さ2.1cmである。内面はナデ、外面は底部付近がナデ、高台に回転ヨコナデが施されている。底部付近が1/4ほど残存している。57は土師器の壊（塊）であり高台径6.4cm、残存高1.9cmである。内外面調整ともに摩滅しており不明である。底部付近が1/4ほど残存している。58～62は包含2層から3層を掘削中に発見された。58～60は須恵器の壊である。58は高台径9cm、残存高2.3cmである。内面の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が1/6ほど残存している。59は高台径8cm、残存高2.05cmである。内面

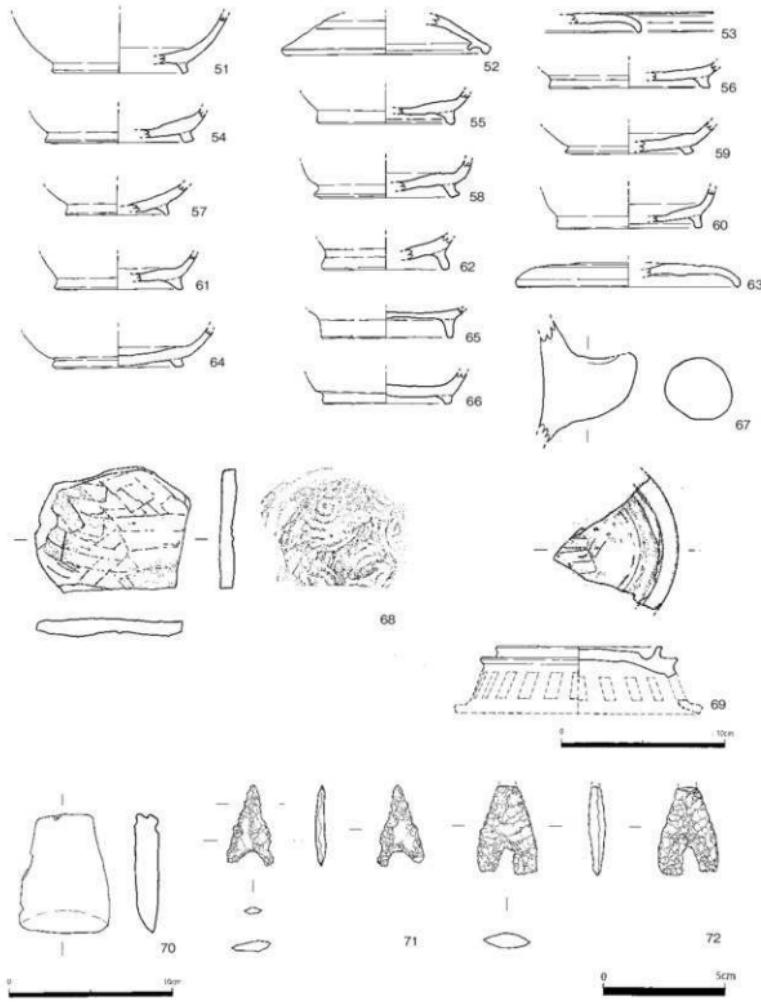


図22 II区出土遺物 (1/3) (71・72:1/1)

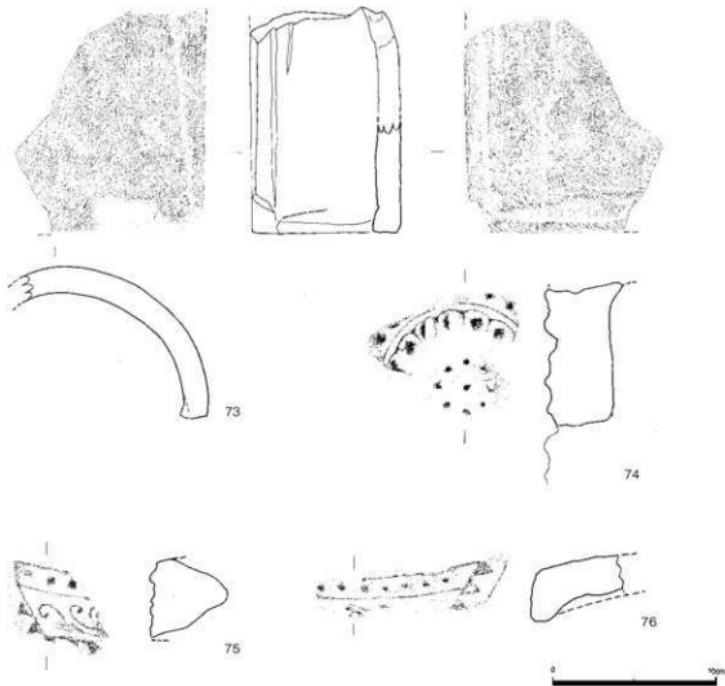


図 23 II 区出土遺物 (1/3)

の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が1/2ほど残存している。60は高台径9cm、残存高さ2.5cmである。内面の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が1/4ほど残存している。61・62は土師器の坏である。61は高台径8cm、残存高2.2cmである。内外面調整とともに摩滅しており不明である。底部付近が1/4ほど残存している。62は高台径8cm、残存高2.05cmである。内面調整は摩滅しており不明である。外面は底部付近がナデ、高台がヨコナデである。63～67は遺構検出面で発見されたものである。63は須恵器の蓋である。口径14cm、残存高1.45cmである。外面上部は回転ヘラケズリ、内面上部はナデ、内外面ともに側面は回転ヨコナデである。頂点につまみがついたものと推測される。1/7ほどが残存している。64は須恵器の坏である。高台径8.1cm、残存高2.6cmである。内面残存上部に回転ヨコナデ、底部付近にナデ、外面残存上部に回転ヘラケズリ、高台に回転ヨコナデ、底面にナデが施されている。底部付近が1/2ほど残存している。65は土師器の坏である。高台径8.2cm、残存高1.8cmである。内外面ともにナデが施されており、高台はヨコ

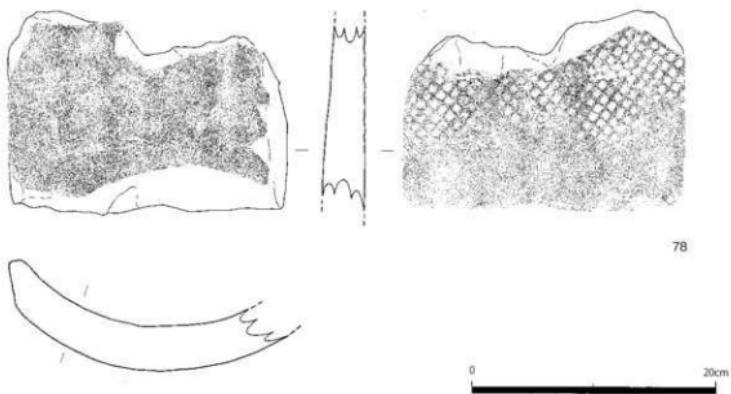
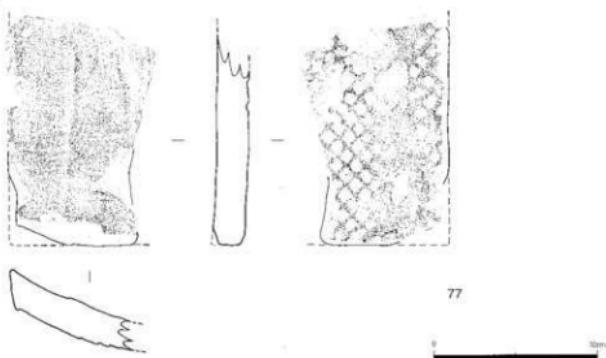


図24 III区出土遺物 (77:1/3) (78:1/4)

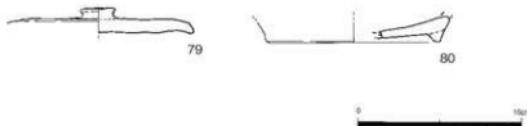


図25 その他の遺構出土遺物 (1/3)

ナデである。底部付近がわずかに残っている。6 6は須恵器の坏である、高台径8cm、残存高1.95cmである。内外面共に底部付近はナデ、側面および高台は回転ヨコナデが施されている。6 7は甌の把手である。内外目調整ともに摩滅しており不明である。6 8は須恵器壺胴部片を転用した硯である。7.5cm×9.1cm、厚さ1.05cmの大きさである。包含2層から3層にかけた掘削中に発見した。墨がわずかに残る。上面はすり目が残っており、硯として使用したとみられる上面とは裏側に同心円当具痕がみられる。6 9は圈足円面硯の破片であり、圈足部に方形透かしを施す。上面の1/6が残っている。上部径10.4cm、最大径12.2cm、残存高1.9cmである。遺構検出面での発見である。上面に墨が残っており、すり目がみられる。7 0は扁平片刃石斧である。石材は凝灰質安山岩ホルンフェルスである。緯7.4cm、刃幅5.4cm、厚さ1.4cm。包含3層から出土した。7 1・7 2は石鎚である。7 1は包含2層、7 2は包含3層から出土した。

7 3～7 6は瓦である。7 3は丸瓦であり凸面に摩滅気味だが平行の叩きが、凹面に布目が残っている。側面はヘラナデが施されている。7 4は軒丸瓦である。中房内には一+八の円圏をめぐらせた蓮子があり、その周辺を短い蓮弁がめぐっている。老司式軒丸瓦の特徴には一致しないものである。包含1層から出土した。7 5・7 6は軒平瓦である。7 5は老司式I式かと思われるものの断言はできない。7 6は摩耗が激しく調整方法を含めて不明である。7 5は包含3層から、7 6は遺構検出面で発見された。

Ⅲ区出土遺物（図24）

Ⅲ区を調査中に発見された遺物である。

7 7・7 8ともに遺構検出面で発見された平瓦である。7 7は凹面に布目、凸面に正格子のたたきがみられ、側面端部にはヘラナデが施されている。7 8は凹面にナデ、凸面に正格子のたたきがみられる。7 8のみ縮尺が異なるため正格子の大きさが異なるようにみえるが、7 7と大きさはほぼかわらない。

その他遺構出土遺物（図25）

7 9・8 0はSD-013から出土した。7 9は須恵器の蓋である。口径11.8cm、残存高1.6cmである。外面上部に回転ヘラケズリが見られる以外は回転ヨコナデが施されている。1/3ほど残存している。8 0は土師器である。器種は不明確だが坏と思われる。高台径11.0cm、残存高1.6cmである。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。底部付近が1/5ほど残存している。

IV. まとめ

今回の調査で発見された遺構は古代の掘立柱建物 1 棟、土坑 3 基、ピット 1 基、時期不明の溝 2 条と中世の水田面である。掘立柱建物は出土遺物などから 8 世紀ごろのものであると考えられ、三宅庵寺を構成する建物の一つであると考えられる。また出土した老司式軒丸・軒平瓦や円面鏡、転用鏡の存在から三宅庵寺が存在した可能性がまた高まったといえる。掘立柱建物 SB-041 は他の 2 号住居址や SB-51 に比べ、主軸が西寄りに傾いている。

さて今回の調査区と第 1 次・第 2 次調査区の標高を比較すると第 1 次調査区と当調査区との高低差が +1 m、第 2 次調査区と当調査区との高低差が +2 m となることがわかった。このことから当該地域は西から東にかけて下がっていく地形となることが判明した。さらに第 2 次調査区と当調査区との距離はおおよそ 150 m であるため、西から東に向かって比較的急にさがっていることとなる（図 26 参照）。このことから三宅庵寺周辺は今まで考えられてきたような比較的平坦な地形ではなく斜面の上に存在していた可能性がでてきた。加えてその高低差や出土遺物や区画溝らしき遺構などから、第 2 次調査区周辺が中心城である可能性が考えられる。そして当調査区は標高では一番低く、調査区の南東部においても中世の水田面以外の遺構は確認できなかったことから、当調査区が三宅庵寺の寺域の東限であったと考えられる。図 26 は『三宅庵寺 2』の Fig.49 に当調査区をはめ込んだものであるが、それをみてもわかるように、中心城から離れた場所であった可能性が高い。

今回の調査結果によって三宅庵寺という寺院跡であった可能性がより高まったといえる。またその地形の高低をふまえると、小高い丘陵の上に存在していたちょっとした山寺のような外観をとっていた可能性もでてきたといえよう。そのため今後周辺を調査する際には地形復元にも力をいれるべきであるといえる。

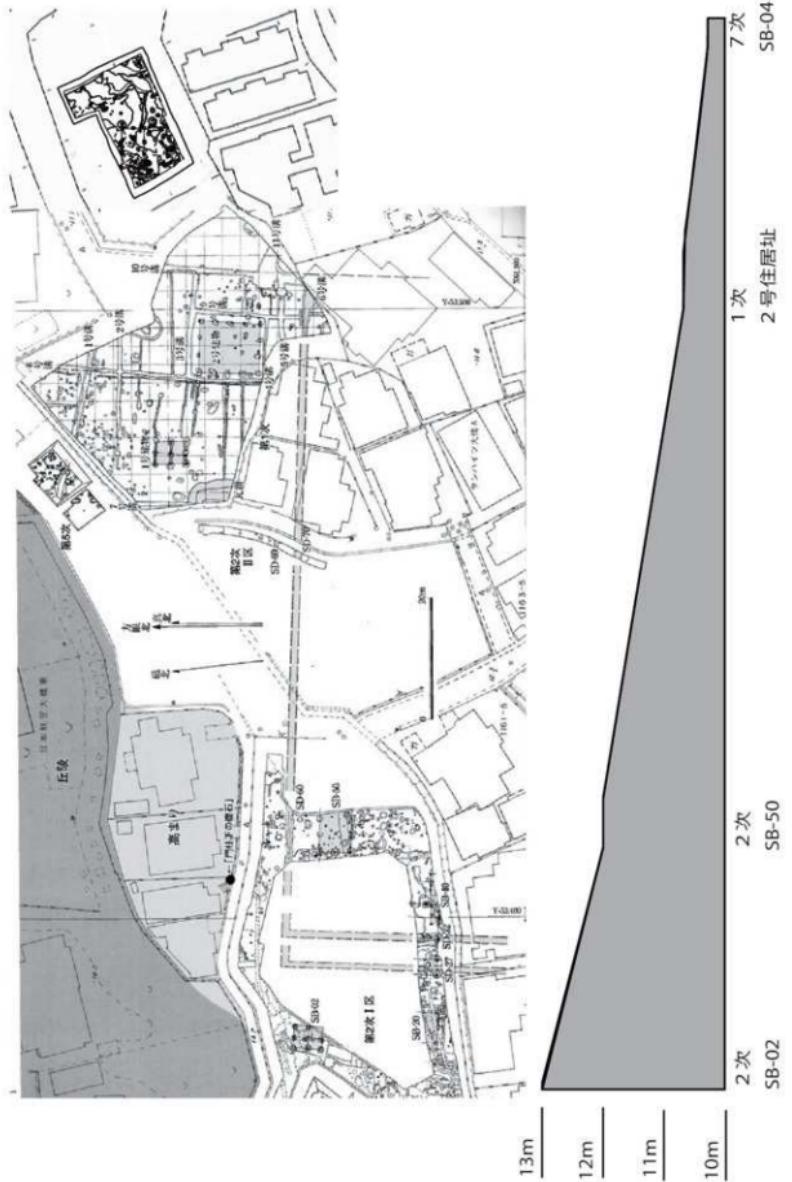


図 26 三宅道路群高低差模式図 (縮尺不統一)

図 版

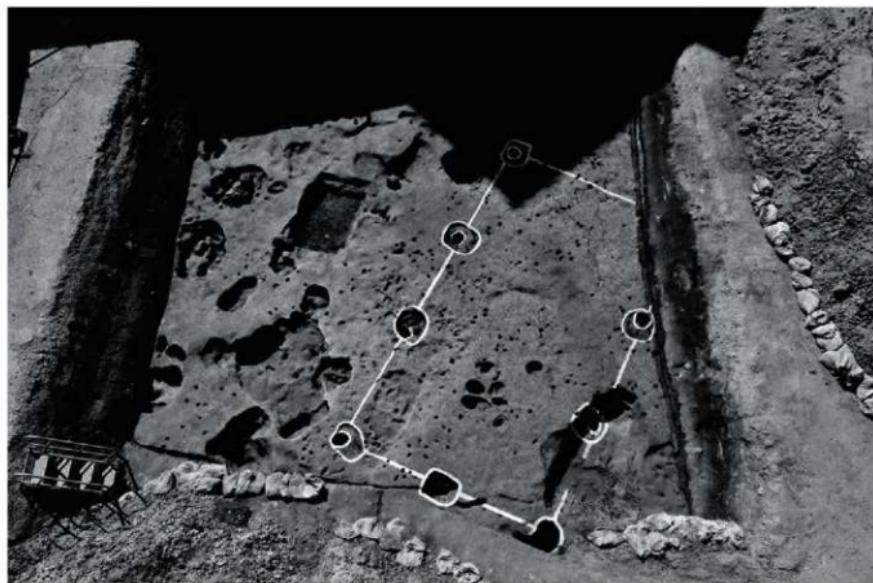
図版 1



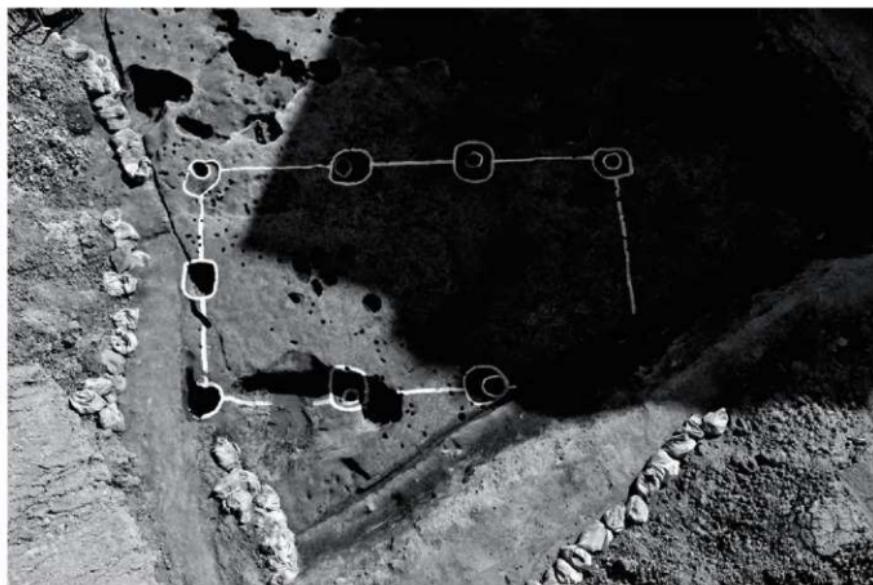
1. I区全景（北から）



2. III区全景（北から）



1. II区全景（東から）

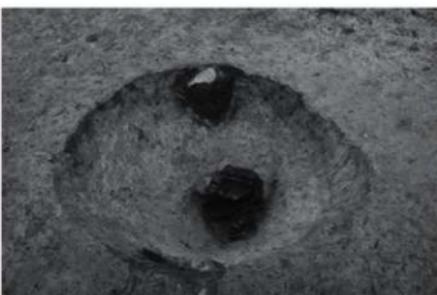


2. SB-041全景（北から）

図版 3



1. SK-001 土層（西から）



2. SK-001（西から）



3. SK-004 土層（西から）



4. SK-004 完掘（東から）



5. SK-014 土層（東から）



6. SK-014（東から）

報告書抄録

ふりがな	みやけいせきぐん1							
書名	三宅遺跡群1							
副書名	—第7次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1433集							
編著者名	三浦 茜							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2021年3月25日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三宅遺跡群	福岡県福岡市 南区南大橋 1丁目 1169-1、 1170-4	43134	2825	33° 33' 13.03"	130° 25' 25.94"	20190722 ～ 20191025	276.11m ²	共同住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
三宅遺跡群	寺院	古代・中世	掘立柱建物、土坑、溝、水田			須恵器、土師器、瓦、圓足円面鏡	三宅廃寺の寺域に相当する建物とみられる掘立柱建物の検出	
要約	<p>三宅遺跡群は主に奈良～平安時代の遺跡によって構成されている遺跡群である。2015年に三宅A遺跡、三宅廃寺、三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡、そして大橋C・D遺跡を包含して称されることとなった。過去においては「三宅廃寺」「三宅A遺跡」として調査がされており、今回は数えて7度目の調査となる。</p> <p>本調査区は三宅廃寺第1次調査地点に隣接している。本調査区で検出された遺構は古代の掘立柱建物が1棟、土坑3基、溝2条、杭跡と考えられるピット群、そして中世の水田面である。出土遺物等のはほとんどは瓦である。掘立柱建物は2間×3間の規模が確認できており、三宅廃寺の寺域院を構成する建物である可能性が非常に高い。また過去の第2次調査地点から本調査区にかけての高低差が2mあることから、従来考えられていたような平坦な地形ではない可能性ができた。</p>							

三宅遺跡群1

—第7次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1433集

2021年（令和3年）3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 九州カスタム印刷
福岡市博多区東比恵3-16-15